

学校教員志望学生の公的スピーチに関する教育的実践(2)

—講座を受講した学生の検討や内省を基にした考察—

川原 誠司

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日

学校教員志望学生の公的スピーチに関する教育的実践(2)[†]

—講座を受講した学生の検討や内省を基にした考察—

川原 誠司*
宇都宮大学教育学部*

本稿は、学校教員志望の学生に対して公的スピーチの講座を開設・実践した報告である。公的スピーチは学校教員になるにあたって重要なスキルと思われるが、それを綿密に学ぶ機会は教員養成課程の中ではなかなか無い。本稿では、この講座を受講した学生について、講座内の検討や学生自身の内省を基に報告する。

キーワード：学校教員志望学生、公的スピーチ、スピーチ不安、心理的側面、具体的指摘

1. 講座受講の学生の様子の検討

本稿は、前稿（川原，2018）で概要説明した公的スピーチの講座を受講した学生の様子を報告する。その上で、講座の意義と課題について考察する。

前稿で示した2名の受講学生の内省について、様々な時点で情報を得るように努めた。本講座の受講申込時には、参加動機につながる自分自身の課題（悩み）について教えてもらうように依頼した。

また、講座中はできるだけ互いの様子を指摘するようにお願いし、実際そのようにおこなえた（受講者2名＋講師1名という少ない人数であったが、それがより綿密なやりとりにつながった面がある）。

さらに、各回の最後には振り返りとして、A4判1枚の記入用紙に自分の感じたこと考えたことなどを記入してもらうように10分ほどの時間をとり、記入してもらった。

講座修了時点で、筆者の知りたい視点を含めた終了時アンケート（付録参照）をメールで送り、それに記入の上、返信してもらった。

本稿では、これら得られた情報を基に報告してい

くが、前稿（川原，2018）でも示したように、参加学生には前稿ならびに本稿に事前に目を通してもらい、掲載の同意をメールにて得ている。情報の利用の際は、個人が特定されることのないように十分配慮し、場合によっては特定されないように加工・曖昧化した部分もある（文意は変えない範囲で）。

次章から、2人の受講者（以下、Xさん、Yさんと表記）の受講での印象や内省について述べていく。なお、4回にわたる講座の各回の具体的内容については前稿（川原，2018）を参照していただきたい。

2. 受講者 Xさんについて

2.1 受講動機

Xさんは受講申込の際、公的スピーチで苦手と感じる点として、「早口になってしまったり整理する前に言葉が口に出てしまったりすること」「言うことがまとまらないこと」ということを挙げていた。Xさんは次年度に教員採用試験受験を予定している方である。

2.2 講座内で得られた様子、本人の気づき

1回目の自己紹介のスピーチについて、筆者としては本人の記述していた「早口」という印象は受けなかった。もう一人の参加者Yさんの印象もその点はほぼ同じであった。

動画から受けたノンバーバルの面での問題としては、スピーチしているときに「目をつむること」が目立っていたことであった。相手を見て話してしま

[†] Seishi KAWAHARA*: Educational practice on public speech of the students who want to be schoolteachers(2): Consideration based on participants' discussion and reflection

Keywords: students who want to be schoolteachers, public speech, speech anxiety, psychological aspects, concrete advice

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: kawahara@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

うと考えが飛んでしまうという不安なのか、目がなかなか開かれなかった。本人の振り返りにおいても「目が泳いでいることなどが映像で分かった」「話す前に、きいている人の方も見ながら、と思っていたが全くできていなかったことに驚いた」といった気づきが表示されていた。

仮想状況でのイメージによる喚起の作業においては、「手汗」「心臓（バクバク、痛い）」「変なこと（を言い出す、聞かれる）」といった言葉が複数回挙がっていた。身体的な反応についての意識が述べられ、前記以外にも「呼吸・息」という内容もあった。「変なこと」に関連しては、話を組み立てる場面で「何言っているのか」「何話せばいいの」といった表現があり、Xさん本人が苦手とした「まとまらない」ということが反映しているようだ。Xさんが身体的な面を意識しやすいこと、しかしそれは自分のバロメータとしての役割を果たせることを説明したので、「手汗が緊張のバロメータと分かったから、対応しやすい？のかな」と振り返っていた。

前稿（川原，2018）で示した公的スピーチ時の否定的反応の質問用紙においては、「自分自身」のことについて全15項目中9項目が最高評定値の「5」であり、2項目が評定値「4」であり、Xさんの否定的な意識がかなり高いことがうかがえる。

2回目について、声の大きさの測定値は望まれる大きさに比して低い結果（ほとんどが50dB台）となっていた。また、文字おこしでの文章内容を見ると、余分な言葉の発声は少なく、コンパクトに表現されているのは利点だが、対象に応じた情報レベルになっていないことや、主たる内容に入る前の導入が不足していたりする面があった。本人の振り返りでも「コンパクトでよいという点を挙げてもらったが、実際深めることは苦手……（中略）。しかし、おおもとを決めて細事を決めていけばコンパクトでも詳しく話せるかも、と光が見えてきた」と記述していた。また、「伝えるためにはカオとか声とかいろんな因子があるのが分かる日だった」という振り返りの記述を見ると、筆者の講座意図は妥当に伝わっている感じがした。

3回目の再スピーチ実習の際には、話の途中で止まってしまうという出来事があった。本人の心配していた「まとまらなくなる」ということが出現し、そこで困っている様子を全員で共有できた。本人の振り返りでも「頭がまっしろ事件になった」と表現

されていた。「相手を見ることを意識して話せていたが、話が被って不安だったところで一気に内容がとんで話せなくなった。焦りが焦りを生んだ悪循環だった」という自己分析もできている。自分の中で「うまくいっていない」という自己暗示のループに陥ったときに、目の前の相手に向かって話したいというエネルギーがほぼ無くなってしまう状態になるといえる。

また、「反応する」ことについては、動画サイト等に出てきた面接者の様子に相当の不安を感じていることがうかがえた。相手はニュートラルな表情をしているのだが、自分でかなりネガティブな受け取り方をしてしまうということである。振り返りでも今回の冒頭で行う質疑応答のことに触れ、「今回は好きな内容だったからボンボン出たけど、そうでなかったときがサーってなりそう」と記述されていた。

4回目の“スピーチ＋質疑応答”については、素材が学校教育現場での内容だったこともあり、話の組み立て段階から困ったようだ。先に触れた「目をつむる」のはそのような思考をするときにしやすいクセのようで、振り返りでも「頭の中で考えるとき必ず目を閉じていて、まぶたの裏側に文章をつくって話している」ということを述べていた。

エゴグラムについては、AC（従順な子ども）の意識について触れていた。本人はCP（厳格な親）のマイナス面の高い伝え方について相応に触れていたが、筆者の見たところでは、ACのマイナス面のほうがXさんの公的な場でのやりとりの際にはより顕著な感じがした。記述の中で、アルバイト先での多めの担当依頼を断れないという実情にも触れていたが、断れないというのはまさにACの部分が強いと感じた。このアルバイトのことはXさんにとって大事な現在の課題であったようで、終了時アンケートにおいて、講座終了直前にあったアルバイトの依頼をうまく断れたことが記載されていた。

3. 受講者Yさんについて

3.1 受講動機

Yさんは受講申込の際、公的スピーチで苦手と感じる点として、「不安な表情が出る」「焦ると考えが整理できないまま話してしまう」ということを挙げていた。YさんもXさんと同じく、次年度に教員採用試験受験を予定している方である。

3.2 講座内で得られた様子、本人の気づき

1回目の自己紹介のスピーチについて、動画から受けたノンバーバルの面では、Yさんの不安が顔の表情や声のトーンに出ていることが印象的だった。不安を感じるときに、口角が下がってくる（極端に言うと「へ」の字に見えるような方向になる）ことや、声がある程度震えて聞こえることは（よい意味でのビブラートというよりも緊張によるかすれた震えに近い）、Xさんからも指摘されたことであった。

Yさん自身の振り返りでも、「（過去に経験した）採用試験の実践練習をしたときにダメだと思っていたところがそのまま出ている」「早口になる」「表情が固い」といったことが挙がっていた。実践練習を経験しているため、「不安を与えるような話し方をしているうちは採用されないだろうと思った」といった自己分析もしている（筆者からすると、あまり否定的になりすぎないように留意してほしいと思うくらいであるが）。

仮想状況でのイメージでの喚起の作業においては、「怖い」「不安」という言葉が複数回出ていた。合わせて「泣かない」とか「圧迫は嫌だ」といった言葉も書かれていたので、相手からきついことを言われる（言われそう）となったときの心理的安定感の少なさが特徴的と言えるかもしれない。

公的スピーチ時の否定的反応の質問用紙においては、「自分自身」のことにについて最高値評定の「5」が全15項目中3項目、評定「4」が2項目であり、Xさんに比べると、否定的なことの知覚水準は低い。ただ「公的スピーチが上手だと感じる身のまわりの人」についての評定が全て評定値1～3に収まっているため、相対的には自分の否定的反応は高いという知覚がなされているようである。

2回目については、声の大きさの測定値は望まれる大きさに比して低い結果（ほとんどが50dB台）となっていた。このことはXさんと全く同じ結果になった。また、文字おこしでの文章内容を見ると、「えっと」というようなつなぎの言葉が随所に入ってしまう、それが緊張を緩和する作用になっているとはうかがえるが、同時に相手に聴き取りづらくする要因にもなっていることが懸念された。1回目の振り返りの時点で「余計な言葉が入る」としているため、気づきはなされている。

2回目の振り返りの中で多く触れられていたのは、講座内で練習した「声を出さずに顔の表情と多少の

身振りで」という条件と「声のトーンのみで（相手は目をつむるので表情は見えない）」という条件とでおこなったノンバーバルでの伝達練習のことであった。「言葉を出せないことがこんなにも苦痛なのか」「抑揚をつけることが苦手」「アルバイトのときに意識して抑揚をつけてみたい」といったように、おそらくは知的な高さがあるので言葉で伝えることに偏重してしまい、それ以外のノンバーバルの要素を磨きにくくしてしまったおそれも垣間見えた。

3回目の再スピーチ実習について、この時は事前の宿題にしたので準備時間があったのだが、それゆえに準備してきたものを頭の中に入れて読み上げてしまうような形になっていたように見えた。そのため、抑揚がつきにくく、感情が込めにくくなる。振り返りでも「時間内に収めないといけないという思いから（中略）……、どうしても用意したことをそのまま話す」といった気づきがなされていた。

「反応する」ことについては、Yさんは採用面接の実践練習をしたことがあったため、動画サイト等に出てきた面接者の様子は類似の経験があったことを語っていた。だからこそ、そのときのうまくいかなかった状況を再度確認できたようでもあった。振り返りでも「目が泳ぐ」「表情が固い」「伏し目になる」といった気づきの記述がなされていた。

4回目の“スピーチ＋質疑応答”については、1回目のイメージ喚起でも触れていた相手（面接者）を「怖い」と感じる気持ちが表示されているようだった。Xさんも似ているのだが、相手との関係の中で相手の反応に過剰の不安や恐怖を持ってしまうと、そちらに意識が向きすぎて自分の言いたいことに対するエネルギーがかなり減ってしまう。振り返りの記述においても「教員になりたい、だからこれについて話したいという思いが伝わるようにしたい」というものがあったが、このように感情が込められる方向の必要性を感じる気づきが見られている。

その点で言えば、エゴグラム的に表現するとFC（自由な子ども）よりはACの意識面が強く、その点ではXさんとも通ずるところがある。

4. 意義と今後への課題

4.1 本講座実施から見えたもの

受講者の気づきを見ても、自分の改善点を確認（再確認）できたという点でも、講座の意味はあった。

また、あまり試験直前におこなってしまうと逆にマイナス面を残しすぎるおそれがあるので、改善できる期間があるこの時期で適切であると感じた。

受講者の2人は、不安や緊張がある程度出やすいという点で、また声が小さいという点で比較的共通していた。その様子を記録媒体で確認できたこと、また騒音計の数値といった客観の数値で確認できたことは有意義だったと思われる。実際、発声について声の大きさの数値を確認した上で、通る声の練習をしたところ、3回目の新自己紹介スピーチでは2人ともほぼ満足できる数値（多くで65dBを超えていた）まで上がった。

問題点を地道に見つめ、少しずつ改善を図っていくという作業は、日頃の慌ただしい中での話し場面においてはなかなか難しい。教育課程の中にもあまり組み込まれておらず、終了時アンケート（付録参照）において、「あなたの教員養成の授業や実習等の中でどの程度学んだものか」と尋ねたが、2人ともほとんど経験していないと回答していた。

終了時アンケートではまた、「周りの教員を目指す仲間を見て、今回の講座内容を受けると効果的だと感じる人はどの程度の割合いるか」という質問もした。Xさんは「7,8割」、Yさんは「1～2割」と差のある回答であった。この差については、2人が設定している目標の差であったり、「何かしらの意義を認められる人まで網羅するか」それとも「かなり困っている人のみに限定するか」の差であったりするかもしれない。それでも少なくとも1～2割いる可能性があることは、今回の2人のみだけでなく一定の教育可能な層があることがうかがえる。

4.2 今後への工夫

潜在的な対象者はいるわけなので、できるだけ参加者を増やしたいという思いはあるが、このような講座は、必要性があっても参加への志向は二極化する。苦手ということで避けられやすい面もある。

必修のような形式にすれば受講者は増えるが、既に免許法の中で様々な必修科目を課されている状況で、意欲の低い人に強制することは非常に難しい。今後の継続の実施を考えたときに、苦手意識を持つ人の参加を増やすにはどのようにすればよいか。

1つのモデルであるが、教員養成の比較的早期の段階で本講座を実施した後、受講生同士がさらなる練習や内省をしていく自主的グループができ、それ

を教員がサポートするといった形式が考えられる。その中で新旧の交流機会を設け、それに触発されて新たな人が講座を受講していくということである。このくらいのアクティブさがあってこそ、真のアクティブ・ラーニングと言えるだろう。

そのような雰囲気は現状の教員養成課程では難しい。その点は教員側としても改善する必要がある。そして、意識の拡がりが見られたとき、科目としても位置づけられるのではないかと期待している。

引用文献

川原 誠司 (2018). 学校教員志望学生の公的スピーチに関する教育的実践 (1) —講座開設の動機と講座の概要— 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 5.

付録

付録1 終了時アンケート

公的スピーチのブラッシュアップ講座 終了時アンケート

★本アンケートについては、ご自身が講座を受けて本当に感じたことを、質問内容に沿って自由に記入するものです。どのように記述しようと皆様の今後の評価等には一切影響しないことをお約束いたします。

問1 本講座内容は、これまでのあなたの教員養成の授業や実習等の中で、どの程度学んだ（字ばなかった）ものでしたか。具体的に教えてください。

問2 本講座を受けてみて、自分の「話し方の課題」として、どのようなものを感じ取りましたか。教えてください。

問3 あなたの周りの教員を目指す仲間を見て、今回の講座内容を受けると効果的（有効）だと感じる人はどの程度の割合いるとあなたは感じますか。

問4 その他に何かあれば、ご自由にお書きください。

平成30年3月30日 受理

**Educational practice on public speech of the students who
want to be schoolteachers(2): Consideration based on
participants' discussion and reflection**

Seishi KAWAHARA